

「第1回ふるさと秋田文学賞」入賞作品 あらすじ

最優秀賞 「竿燈万華鏡」

こだま
児玉ヒサトさん (秋田市)

秋田市街を舞台に「竿燈まつり」を主題とした四篇の短編。1) 缶ピース伝説。主人公「僕」が町内の名物爺さん「長老」の十三回忌の法要で七月の町の様子や長老が缶ピースをくゆらせながら「明治十九年、俵屋火事があった年のねぶり流しは素晴らしかった」と語り始めた物語を回想する。2) イチゴ味の雨。竿燈の夜、初のデートを「私」と彼女は土砂降りに襲われる。四年後、二人は破局するが最後のデートの竿燈も土砂降り。四十年近くが経ち、私は孫を連れて竿燈に出かけるがやはり土砂降りになる。一度別れた二人がのちに夫婦になったこと、彼女がすでに亡くなっている設定である。3) 拙者はウミネコ 語り手は一羽のウミネコ。毎夜広小路のホテルのビアガーデンに飛来する有名な鳥である。千秋公園・中土橋で佐竹曙山と小田野直武の幽霊同士が秋田の少子化を嘆いたりする会話を立ち聞きしている。4) 中土橋幻想 秋田生まれで東京暮らしの主人公「高瀬」が千秋公園・中土橋でふいに幻想を見る。昭和四十年前後の街、昼竿燈、幼時にみた父の竿燈を差す姿、思春期の頃に父を亡くしたことなど。

優秀賞 「焼畑の子」

やまきた のぼる
山北 登さん (湯沢市)

九月上旬のある朝、竹原雄介は珍しく早起きをして裏の畑へ行き、祖母の野良仕事を手伝おうとする。雄介は一週間前、再会した実妹の中富志穂から中富酒造への転職話を持ちかけられていた。秋田県南部の湯沢市でも有数の富豪・中富家は雄介の母の嫁ぎ先でもあったが、姑や小姑の冷たい仕打ちに耐えかねた母が幼い雄介を連れて実家へ逃げ帰って以来、祖母の憎しみの対象とされていた。小学生時代にも雄介は志穂の手引きでこっそり中富の家へ遊びに行っていたが、三年目に発覚して中富家の出入りを祖母に禁じられ、父が後妻に生ませた子である志穂とも長い間交流が途絶えていた。苦手な早起きをしてまで畑仕事を手伝おうとしたのも、祖母に転職を認めてもらうためだったが、その朝は言いそびれた。高校を卒業したあと地元の誘致工場で精密機器部品加工の工場に勤めていた雄介は、日頃から地場産業に就きたいと思っていただけに、この転職話にも乗り気だった。信頼するチーフに打ち明けて内諾を得たが、次は家で絶対的存在の祖母を説得しなければならない。夜に祖母を説得しようとしたが、「勝手にせい」の一言で片付けられてすっかりしないものが残り、翌日以降も祖母の歡心を買うため雄介は毎朝早起きをして畑仕事を手伝う。工場勤めをするようになってから途絶えていた畑仕事で久しぶりに汗をかいているうち、雄介は忘れかけていた畑と作物への思いを取り戻していく。